

「被災地における内職プロジェクトー現地の雇用創出と地域のコミュニティ構築を目指して」事業

手芸を核とした生活自立支援を行うことで被災地に新たなコミュニティビジネスを確立する

それぞれの思いを込めながら、一針一針手を動かすことで悲しみから立ち上がることができるのではない。「未来を信じ、心をつなぎ、共に生きぬこう」を合言葉に、東日本大震災の被災者支援活動をスタートさせたサンガ岩手は、心の伴走者として被災者一人ひとりに寄り添いながら、手芸を核とした新たなコミュニティビジネスの確立に努力している。

仮設住宅の集会所から生まれた生きる張り合いとしての手芸作品

「何かできることがあるのではないかな……」、その強い思いが、盛岡市で僧侶として活動していた吉田律子さんを動かした。2011年3月11日、岩手県沿岸部に甚大な被害をもたらした東日本大地震による津波。居ても立ってもいられなくなった吉田さんは、被災地支援のボランティア活動拠点として立ち上がった遠野市の「遠野まごころネット」に駆けつけた。「とにかく被災者の方々に寄り添い、抱きしめたいという思いでいっぱいでした」と、当時を振り返る。傾聴ボランティアとして沿岸部を中心に歩くうちに、その被害がもっとも激しいと感じたのが大槌町だったという。「地縁などまったくないところでしたが、数多くの被災地を回るよりも、一人の人に10回会うほうがよいと考え、大槌町の33か所の避難所を一人で回ること

にしました」と、吉田さん。

大槌町では、被災者全員が7月31日までに避難所から仮設住宅に移ったが、それとともに吉田さんの活動場所も仮設住宅へと移った。「お盆が終わり、帰省していた近親者などがいなくなると、仮設にいる方々は再び虚無感にとられるようになりました。また、仮設住宅という非日常的な環境のなかで、人間関係やコミュニティ維持の難しさが顕在化してくるのが見えてきました」と、吉田さんは話す。

「でも、女性を中心に、働きたい、人の役に立つことをしたいという方々が出てきました。そこで、そういう方々に声をかけて集まってもらい、仮設住宅内の集会所で、お茶を飲みながら話をしました。すると笑顔とともに、何か夢中になれることはないかという話になり、かつては裁縫や編み物をよくしていたというので、まずは手を動かしてみようと、最初は自分たちのために雑巾を作ることになったのです。雑巾作りは、「仲間が集まって楽しく過ごすための方便」だったかもしれないが、それが「形になることの喜び」につながり、さらに盛岡で開かれたチャリティバザーなどで売れて、少ないながらも収入を手にするようになると、「孫へお小遣いを渡せる」、「美容院に行ける」など、生きる張り合いが生まれてきたという。



サンガ岩手の活動の様態を伝えるパンフレット



盛岡市で行われたチャリティバザーにも参加



「手づくり工房おおつち」で商品製作に励むメンバー



母川回帰の願いを込めて作成される大槌町の特産のサケをモチーフにしたストラップなど

「手作り工房おおつち」を活動拠点に生きがいや仕事づくりの支援を展開

吉田さんを理事長とするサンガ岩手では、この手芸を被災者の生活自立支援や生きがいづくり、仲間づくりの手段にしようと、2013年7月に大槌町に「手づくり工房おおつち」を立ち上げた。「当然ながら、仮設の集会所は自分たちだけで使うことはできません。手芸の作業場や好きなきときに集まれる場所としての拠点がほしいと思っていたら、被災を免れた家を使ってもいいという方がいらっしやだったので、そこをお借りして工房にしました。工房の一角では専従のスタッフを置いてカフェとしても営業しています」と、吉田さん。

現在、この工房では、仮設住宅を単位とする6グループ(大槌4、釜石2)が活動しており、そのほかに個人で参加している人も含め、約100名が参加している。工房で作られる商品はサンガ岩手のホームページで見ることができるが、雑巾、大槌町の特産である母川回帰を象徴するサケをモチーフにしたキーホルダーや人形、シャツやチュ

担当者より



被災地密着型の支援をするための拠点ができました

NPO法人 サンガ岩手
理事長
吉田律子さん

生きがいや仲間があることで、人は生きていくことができます。今回、助成していただいたおかげで、今後、町が再建され、生活が軌道に乗るまでの間、大槌町の被災者を支えていくために必要な人材や場所の確保ができました。これからは浜の文化を生かしたものなどを作っていきたいと考えています。今後とも、継続的な支援をお願いいたします。

ニック、スカーフやバッグまで、多彩なラインナップとなっている。手芸製作のほか、この工房では、誰でも参加できる行事として、毎月11日の月命日、お食事交流会、全国から講師を招いてのものづくり教室などを開いている。

「自分たちが作ったものが売れるという喜びだけでなく、それを誰かが使ってくれることによる社会参加意識や達成感がみなさんを動かしていると思います。それが生きがいとなったり、誰かとつながりたいという思いを満たします。なかには、毎日、死に場所を探していたが、刺し子の刺しゅうを始めて生きがいを見つけたという90歳のおじいさんもいます。これからは“被災地”というラベルの効果が薄れてくるでしょう。そのなかでも勝負ができるブランド力のある商品を開発していくことが課題です。また、あくまで生きがいのためという人と、仕事としてやりたいという人が混在しているので、分業化などの方法で両者の融和を図っていききたい」と、最後に吉田さんは今後の方針を語ってくれた。

岩手県遊技業協同組合から

大槌町は東日本大震災の激甚被災地のひとつです。そこを同じ岩手県内の盛岡市に拠点を置くNPOが地域密着型の生活支援をしているということで、地元への復興のお手伝いできればと、助成させていただきました。